

# 教壇学院報

2020. 8. 1  
第95号  
真宗高田派教学院

この題字は宗祖聖人八十六歳の時にお書きになられた『尊号真像銘文』（本山蔵）の文字から作成したものです。

## 宝物館と堯猷上人

新  
光  
晴

宝物館建て替えに伴う国宝・重文などの文化財を含む宝物移転は、三重県博物館「M I E M U」収蔵庫へ完了しました。指定物件ではない宝物については、専修寺山内の収蔵庫にも保管されています。ここには、堯猷上人の御蔵書も含まれており、サンسكريット語・パリー語の仏教学・インド学の原典や英語・ドイツ語・フランス語で書かれた一千冊を超える研究書が保管されています。御自筆の図書カードが残されているものの、閲覧に必要なデータを記載した詳細な目録が必要のため、調査を開始しています。

現在までに判明した注目すべき書籍は、南条文雄・マックス・ミューラー共著による法隆寺所蔵の『貝経（ばいよう）』経典（7世紀、出版当時は最古の仏教経典として知られていた）、タイ王国から寄贈された『パリー語大蔵経（タイ国文字表記本）』

一身田にて出版された『スマーガダー・アヴァダーナ（釈尊に祇園精舎を寄進した給孤独園長者の娘スマーガダーに関する仏教説話）』。あるいは、『ジャータカ』・『デイヴァ・アヴァダーナ』・『マハーヴァストウ』等の仏教系物語文学関係の原典・翻訳書は言うまでもなく、インド最古の教典『ヴェーダ』とその奥義書である『ウパニシャッド』・ヒンズー教の叙事詩『ラーマヤナ』・『マハーヴァアラータ』・『プラーナ文獻』などインド説話文学の基本資料とその解説書が網羅されています。

堯猷上人の御蔵書の多くには、欧州留学中に学ばれた、写本の歴史的な成立の変遷を批判的に研究するという、当時としては新しい手法が用いられています。帰朝後程なく専修寺に入られた上人は、御得度後すぐの明治三十三年に高田本山専修寺の歴史と文物を紹介する冊子（上下二冊）を東京の出版社から上梓され、親鸞聖人直筆の聖教や御消息と門弟たちの書写本や専修寺文書を初めてリストアップし公にされます。宝物の調査は、御内事の中書職に就かれていた松山忍妙明師一人で担当され、現在でも、宝物の上包には松山師の墨書が確認出来ます。この時、宝物管理と研究の基本的な準備が整い、大正時代には立教開宗法会の記念品として聖人直筆の『尊号真像銘文』をコロタイプ写真版にて東京の審美書院から刊行され、昭和五年の高田学会発足と学術誌『高田学報』発行により真宗聖教の研究が本格的に開始されたのです。

新しい宝物館は四年後の完成予定です。堯猷上人が宝物目録を公表されてから百二十五年目となります。

## 煩惱というウイルス

第二部会 上田 英典

私の好きな作家の一人が星新一さんです。

星新一さんは、大正十五年、東京文京区生まれの作家です。父親は星製菓の創始者星一ということもあり、一時期は会社を継いで社長を務めたという異色の経歴の持ち主です。

ショートショート（短編小説）という分野を開拓し、千篇以上の作品を生み出したSF作家の第一人者です。星さんは平成九年にお亡くなりになりましたが、令和時代を予言したような作品が数多くあります。その中にコロナウイルス状況下で、私の頭の中で絶えず反芻されている作品があります。

「プレゼント」という作品です。こんなあらすじです。

『宇宙の一角にあるラール星の住民は、地球で危険な核爆発が起こっていることに気付き、ぐずぐずしてはられないと、一台の宇宙船を地球に向けて発射しました。』

数日後、突然地球に百階建のビルぐらいの大きさのロケットが現れました。

人々が驚きつつ見守る中、ロケットからトカゲとカバを足したような巨大な怪獣が十匹以上出てきました。怪獣たちは辺りのすべてを踏みつぶしていきました。人々は避難しつつも、銃やロケット弾を打ち込みましたが怪獣には全く効きません。さらに悪いことに怪獣たちは繁殖を始めました。

世界各国は人類の危機に際して、戦争などの問題を棚上げして協力しました。

ありとあらゆる方法を動員してやっとのことで怪獣を退治することができました。

そして、これからは地球上での争いは打ち切りにして、宇宙からの相手に備えなければならぬと、原水爆の実験競争をやめ、人類は国境を超えて一致団結することになったのです。

一方で怪獣を送り込んだラール星の住民たちは、地球に核爆発がなくなったのを知り、「われわれの心のこもったプレゼントが役に立ったようだ、こんな可愛い生き物を見たら誰だって心が和やかになる。住民たちも喜んでくれただろう。」と彼らの足元で甘えるトカゲとカバを足したようなペットを優しく見つめました。』――

「共通の敵の存在を知らしめて、地球上の国家間の争いを鎮める作戦だったのかと思いきや、核爆発が止んだのは可愛いペットをプレゼントしたおかげと考えていた」というのが

オチですが、この作品には、ラール星人と地球人との体つき・文化・考え方の三つの違いによる勘違いがユーモラスに描かれています。

一方でそれを地球人はなかなか乗り越えることができないと皮肉っているともいえます。今回のコロナウイルスをこの怪獣に置き換えてみたらどうでしょう。

コロナウイルスという難敵に世界各国は共に情報を共有し合って対応しています。

この戦いに勝利した後は、小説のように国境を超えたつながりを構築できれば人類としての共通の欲びとなりまた大きな財産となりうるでしょう。しかし、実際は小説のようにはいかないようです。収束の兆しが見えてきたとたん、国同士は一致団結するどころか責任のなすりつけ合いが始まっています。

それは国同士の関係だけではありません。分け合うべき物資を、私利私欲のために買い占めに走った人もいます。デマを流した人もいます。

また感染者はまるで犯罪者のように扱われ、偏見やいじめも起こりました。

人の体に感染するコロナウイルスも怖いですが、人間の根本に潜む自己中心性、煩惱というウイルスこそいちばん怖いものかもしれません。

仏教は、「全てのものは因縁によりつながり合って存在し

ている」と考えます。実際に、情報だけでなく人や物資の動きは世界中で加速しています。今後もコロナウイルスに限らず地球規模での危機に直面することもあると思います。

私たちはもう日本人、中国人、アメリカ人という人間の都合でひいた境界の中で論じるのではなく、私たちはひとつの「宇宙船地球号」の乗組員であり、宇宙船の中で起こることはすべて自分たちに関わっている。自己を主張して争っている場合ではない。すべての人は「つながり」をもって生きていくこと、そして、仏教の原点である「喜びや悲しみをお互いに分かち合う生き方」をしっかりと後世に伝えていく必要があるのではないのでしょうか。

## 無常の風は、慈悲の風

第三部会 岡 知道

相も変わらず落ち着かぬ私が、落ち着かぬ世をこしらえております。自坊におきましては、昨年に引き続き今年もお葬式の多い年となりました、まことにおさみしいことであります。

見知らぬ人が何人亡くなくても眉ひとつ動かさぬこの私ですが、小さい頃からお育て頂いた、あの御方この御方の御往生に際しますと、否が応にでも「無常の風」を感じずにはおられません。

”諸行無常“とは「常なるものはひとつとして存在しない」という如来の金言ですが、この”無常“が”風“にたとえられるのには、「命の灯を一瞬にして吹き消すところ」に由来すると聞かせて頂いています。それは、老若男女も、貴賤も、知者愚者も、貴方も私も、差別なく皆等しく。

時に私はこれを「はかない」と感じ、「悲しい」と嘆き、「苦しい」と味わいます。こんな出来事は、こんな想いは、私の人生に於いて「不要」で「無益」で「無駄」なものだと思いません。

しかし、「南無阿弥陀佛」を聞かせて頂く処に、私の内からは決して出でくるはずのなかった味わいを授かるのです。この「悲しみ」が無ければ、「苦しみ」が無ければ、私はいのちにふれることは、かなわなかったでしょう。こんな経験なんてしたくなかった、でも、今ここで、私に本当の「有難さ」を喚び掛けてくださっているのです。

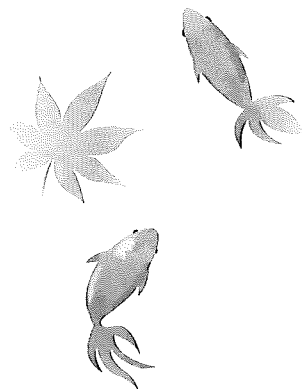
「生まれたら死ぬ。」こんな当たり前なことを、私は決して理解したくない。しかし「南無阿弥陀佛」の如来様と共にある時、この「悲しみ」が無意味ではなかった、私には到底理解の及ばない無”量“の意味をもっていた、と嘯み締めさせられるのです。

”風“は肉眼に映りませんが、何かに作用した時に、その存在が知らされます。「今生の別れ」は、その灯が消えることによって”無常“という見えないものあきらかにし、また同

時に私の善悪を超えた”あなたという存在の尊さ“を教えてくださいました。

死してなお、あなたから恵まれるお育てにうなだれながら、御念佛を賜る日暮しであります。

合掌聞名



## 真宗入門講座報告書

第一部会主任 金 信 昌 樹

令和元年度真宗入門講座は、『讃阿弥陀仏偈和讃』をテキストとし、5名の研究員による全5回の講座をもって行う予定で始った。今年度の講座では、和讃四十八首全の原文と訳を対照させたテキストを作成し、講座5回全体の共通テキストとして用いることにした。

第1回講座は、1月20日（月）13時30分から行った。講師

は金信研究員で、『讚阿弥陀仏偈和讚』の総説として講義を行った。聴講者数は39人であった。

第2回講座は、2月12日（水）13時30分から行った。講師は中村研究員で、第1首から第13首までの範囲を講義した。聴講者は、33名であった。

第3回講座は、3月18日（水）13時30分から行う予定であったが、コロナウイルス感染拡大により、密閉、密集、密接の三密を避けることもあり、延期することを決めた。第3回以後の講座について、その後の状況の推移を踏まえて再開するか、延期をするかの検討を行い、その結果、令和2年度は例年通り12月又は1月から同内容で開催することに決定した。ただ、再開できるかどうかは、感染状況、事態の状況に由ってどの様になるかは見通すことができない。講座を楽しみにしておられる受講者の方々にとっては誠に申し訳なく、研究員一同残念に思うところである。ウイルスの終息、事態が収束することを願うばかりである。



## 今年度の布教伝道研修講座について

第三部会主任 大河戸 悟道

コロナ禍の中、当部会の研修も中止が続いております。（5月18日の布教伝道大会、7月22日の第一回布教伝道研修講座）三密を避けて感染防止を考慮する限り、講座再開に対して慎重にならざるを得ません。現在、10月7日の第二回布教伝道研修講座に関しても検討中（7月20日現在）であります。今後の地域の感染者推移を見つづけて決断を下したいと思います。

末寺の法要も軒並み中止、縮小となり世間から法話を聞く事の出来る場が消えてしまいました。もしコロナの脅威がこの先もずっと続いたとしたら、仏法を伝える手立てを根本的に転換して行かねばならないことでしょう。それが果たしてどのような方法なのか、まったく思ひ浮かびません。

ひよっとしたらそれは法話を学ぶ僧侶にとっても時間や距離の制約を受けない誰もが参加しやすい研修スタイルに繋がるかもしれません。

## 第25回 研究発表大会について

現在、日本国内において新型コロナウイルスの感染例が相次ぎ発生している中感染経路が未だ明確に判明していない症例が多数見られます。そのため、不特定多数の方が集まる行事を実施することについて、感染の危険性が危惧されている状況です。

つきましては、今年度、10月30日（金）に開催を予定していた第25回教学院研究発表大会は教学院研究員のみで開催し、午後からの特別講演は取り止めとさせていただきます。また、感染症の感染状況が今よりも悪化した場合は会そのものを取りやめとさせていただきます。

何卒、ご理解いただきまして、新型感染症が終息してからのご聴講賜りますようお願い申し上げます。

令和2年8月20日

教学院研究員一同

令和二年度

## 第二回 布教伝道研修講座中止について

この度の新型コロナウイルス感染症の感染状況に鑑み、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、十月七日（水）に予定しておりました第二回、布教伝道研修講座を中止いたします。前年度、そして今年度も二回続けて、布教伝道研修講座を中止とすることはまことに残念な事であります。感染状況が改善され、今年度中に再開できることを待ちたいと思います。

なお、今後予定しております講座につきましては、現在、未定です。今回のように状況に応じて判断し、皆様にご案内申しあげます。

教学院第三部会研究員一同

